

創造・誇り・愛！ 輝く七中 煌めけ生徒！！

立川市立立川第七中学校

校長 渡辺 政彦

学校だより 第7号

令和2年11月9日



とらのき

〒190-0034 東京都立川市西砂町 6-28-3

TEL (042) 531-0511~3 FAX (042) 531-6103 URL <http://www.tachikawa.ed.jp/jh07/>



油 断

校長 渡辺 政彦

早いもので11月も半ばとなり、来週末には期末考査があります。ぜひ早めに計画的に準備をしてほしいと思います。さて、今日は、学校生活を送るうえで、学級や学年など集団を高めるために意識してほしいことをふれたいと思います。

それは「油断」という言葉についての話ですが、大変興味深い内容だったので紹介します。この「油断」という言葉の語源についてはいくつかありますが、比叡山延暦寺の説を紹介します。比叡山の延暦寺根本中堂に1200年前からずっと大切に守られている宝があります。それは延暦寺を開いた最澄が修行で使っていた炎の灯火（ともしび）で、その灯火を守るために菜種油が切れないように注ぎ、炎の芯が燃え尽きそうになると新しい芯に代える。そういった営みを1200年の間、永々と続けてきたそうです。

では灯火は、誰が、どのようにして、守り続けてきたのか。大勢の灯火係りを決めたり、あるいはお寺の中でその管理の仕方や役割がしっかりと確立されていたのかと思ったのですが、その答えがとても意外で、奥深いものでした。

「係りとか役割を決めたら、何年かはうまく出来るかも知れない。しかし、役割を決めた瞬間に誰かの仕事というような甘えの心が芽生えて他人事になってしまう。そこに失敗の原因が隠されている。」だから比叡山では、誰も役割はもっていないそうです。「気づいた人が油を足し、気づいた人が芯を代える。自分たちが命に代えて守らなければならない宝である灯火は、他人事ではなく自分事である。それは役割や係りの分担で行うものではない。」というものです。油が切れたら灯火は消えてしまう。『油断』とは、心の中に迷いや怠慢が満ちて、当たり前前のができないことを指し、「油断」という言葉は、比叡山の灯火を守ることから生まれた言葉だそうです。

もちろん集団生活において、与えられた役割に責任をもつことは大切なことです。しかし、一方で役割を決めた瞬間に誰かの仕事になり、他人事になってしまう。他人ごとになってしまうえば自分は関係がなくなり、そのことに関心がなくなるというのも一理あります。

先週、金曜日に生徒総会があり、土曜日には横田拓也さんの「命の講演会」がありました。二つの内容を同等に比較はできませんが、共通することは委員会活動や拉致問題について“自分には関係ない他人事”としたらそこに進歩はありません。学校をよりよく、すべての人が気持ちよく過ごせる場所にするために自分がすべきこととは何か。自分達が守らなければならないこととは何かを一人一人が”自分たちの事”として考えることで意識が高まり、学校や学年やクラスが向上していきます。ひいては、こうした集団に所属する自分も知らず知らずのうちに伸びていきます。関心をもつこと。自分のこととして考えること。そうした人が増えることで、みんなでよくしていこうとする意識が高まり、集団も向上していくと思います。

最後に、新型コロナウイルス感染防止により、学校公開など未だに実施が難しい状況ではありますが、12月には保護者も交えた個別の全校面談を予定しております。家庭や学校での生活面や学習面、進路など心配な点がございましたら、この機会にご相談いただければと存じます。

